釣れ釣れなるままに

２００５年思い出の釣行記 PART.　７

己の欲するところ人に施す

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第７回大会

☆開 催 日	平成１７年１１月１３日			
☆開催場所	春立港～浦河港			
☆入釣場所	井寒台			
☆潮	満潮	０１：００	１１４㎝	
	干潮	０６：４７	６３㎝	
☆釣　　果	カジカ	３７０	㎜	１
	ハゴトコ	１９０	㎜	１
	重量	１１０	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	６７０	点	
	順位	７	位	
	累計点	１９	点（②７②⑥⑤④７）	
	年間成績	４	位	

カジカの督促

職場の同僚から「そろそろカジカが美味しい時期になってきましたね。釣りの予定はないのですか。」と婉曲な表現での督促がある。今年は絶不調で私自身もまともな魚を口にしていない。プリッと引き締まった身、フワッフワッと甘いキモ、チュルチュルと啜る目玉や口の周りに付いたゼリー状の肉を想像しながら出かけるのだが、他人が釣った魚を見ながら涎を垂らすばかりであった。海水がいつまでも温かくて魚が岸寄りしておらず、未熟な私の竿にかかるカジカなどいないのだ。前半こそ、そこそこの釣り物もあったが後半に

なると出発前の意気込みとは裏腹に打ち拉がれての帰還と相成っていたのだ。おのずと年間成績の方もパットせず、今回は鍋の主役だけを狙っての気楽な釣りである。

釣り新聞などの情報では、井寒台、三石、春立で大物の便りが僅かに聞こえるようになったが、低い点数での争いとなっているのが伺える。しかし、ここ数日間の冷え込みにあわせて海が荒れたこともありほのかな期待をもって参加した。釣り場は、明け方の波が３ｍとの予報もあって時化に強い井寒台に決定した。井寒台は私にとっては初体験になるが、釣遊会の年間身長賞となるカジカが何度もあげられた場所で、５０㎝オーバーが嵐、秦野、渡辺氏等によって記録されている。それ故、大物ポイントには、先に入った釣り人によって押さえられており、なかなか入ることが出来ない所でもある。

井寒台の各舟揚場に光るケミカルライトを横目に見ながら最後に釣りバスから降りた。幸いなことに教えられていた場所に釣り人は誰もいない。円い穴の空いたコンクリート製斜路の一番左端の角に竿を設置する。僅かに遅れて「北の釣り会」の堀氏がきた。「真っ直ぐ投げるんでしょう。」と私に確認し、すぐ左隣にあるチョロ川前に竿を立てた。ガチャガチャ場にもかかわらず竿三本の先に光ったケミカルライトがきれいに並んでいる。私はといえば不揃いの竿や方向性の定まらない投竿のためにケミカルライトがちぐはぐデコボコで揃わない。堀氏がカンカイばかりでカジカが来ないと移動を決める。「ここは大物はいないがカジカは数が揃うところなんだが」とぶつぶつつぶやきながらの撤収である。

私にもチビハゴトコが１匹きたのだが、これを後生大事に持ち歩き審査に提出することになろうとは思いもよらなかった。この場をあきらめ井寒台方向にトコトコと歩き出したが、各舟揚場には釣り人が隙間なく並んでいた。少し大きな舟揚場になると２人も３人も所狭しと竿を並べている。一人一人に釣果を聞いて歩くがカジカを１本あげていればよい方である。井寒台の街外れまで歩いても釣り場に入ることはできず、今来た道をまた、とぼとぼと引き返す羽目になった。東井寒台の砂原で、「北の釣り会」の沢井氏がいたので様子を伺うと「駄目だねえ。私も井寒台が駄目だったのでここで仕方なく打っている。ここも悪いところではないはずだが、潮も真っ黒く濁っているので期待はあまりできないなぁ」と呻いている。

とうとう初めに入ったところまで戻ってしまう。中央の大きな舟揚場の隅が空いていたのでそこで改めて打つことになった。漁師が使うテント小屋に入って休んでいる釣り人がいたので話し掛けてみると、目だけは爛々と竿先を見つめているのだが、左右に振る手に力がない。

命の洗濯

遠投の竿に何を間違えたか３５㎝ほどのカジカが来ただけで静かな状態が続く。老漁師がやってきて「どうだい。釣れたかね」と声をかけてくれる。先程の御仁と同じように力なく左右に手を振ってみせる。

「今年は、カジカの岸寄りが遅れているもんなぁ。３日前に仲間がカジカを釣ったという

から様子を見に来たんだが。駄目かぁ」
「釣りをなされるんですか」
「暇つぶスにな。そこらへんに投げておいて。時たま見に来る程度だ。どこから来なさった」
「岩見沢です。命の洗濯にきました。」
「命の洗濯かぁ。命の何を洗うんだぁ。洗うのはいいがその辺に投げっぱなスにスていくなよ。生きていくのにそんなに煩わスことがあるかのぅ。勤め人は人とのつき合いがめんどくせぇんじゃろう。ワスは、こんな辺鄙な漁村で何ズウ年も生きとる。暮らスの不便さは確かにある。自然も手厳スい。だけんど、この美スい風景はどうだぁ。都会暮らスじゃ、決すて味わえるもんじゃねえ。人間の幸せたぁ、いったい何なんだ？　山も川も海も人の心さえも澄んだこの土地に生まれ、育ち、自然のありがたさを感じて生き、また、ふるさとの地に還っていぐ。これが最高に幸せではあんめいかぃ。」
とその老漁師は木訥と語るが、私にとっては仙人にでも会ったかのような心持になる。
　私は何より釣りが好きだ。そして、それにあわせて嬉しいのは、地元の方々との屈託のない会話である。素朴な人情に触れながら誰彼となく交わす取り留めのない話。命の何を洗うのかと聞かれると戸惑ってしまうが、とにかく幸せな気分になる。額に刻まれた深いしわ。ゴツゴツした手の甲。盛り上がった肩。それは厳しい漁村の暮らしを物語っている。しかし、その一言一言に厳しさの中で培ってきたであろう人の温もりを感じるのである。
「お前さん、随分遠くに投げてんなぁ。ここはほんのチョビッと投げりゃ魚がいるんだよ。舟揚場から舟が出て行けるように横に溝が掘ってあるんだ。その糸の張り具合から見ると投げすぎだもんなあ。」
　このような情報も、地元の人間だからこそ惜しげもなく話してくれるのだ。釣遊会には漁師の女将さんに誘われて朝風呂までご馳走になった心臓に毛が生えたような仲間もいる。朝風呂の後に更に違うものをご相伴にあずかったかどうかは口を濁しているのだが・・・。弁天さんにも観音さんにも合掌。

カジカ鍋にありつく

　周辺にいた一団が帰り支度を始めた。そして、カジカを捌いていたなと思う間もなくいい匂いが漂ってきた。空きっ腹の虫を鳴していると、その集団の内の一人が、湯気の上がった熱々のカジカ汁を私に持ってきてくださった。
　美唄市峰延町から５名の仲間が毎年のように釣りにやってきて、釣り終わった後は浜鍋を囲んでいるのだという。昨晩からここでカジカをねらって陣取り、４７㎝を頭に一人につき１．２本の成果しかなかったが、これが楽しみでやっているのだそうだ。

２台のワゴン車の間で暖をとりながらにぎやかに歓談している。カジカ汁の中には大根やサツマイモ、ネギなどの野菜がどっさりと入っており、素晴らしい味を醸し出している。寒い中、一晩中釣りをした後のカジカ汁なので、その温かさと共に人の温もりを感じて特別な味わいがした。

「釣遊会」の会長である嵐氏のことをご存知の方や、「浜釣り会」という釣り会に所属しているという方もおり、今後是非「岩見沢釣遊会」とも交流を持っていきましょうと約束をして見送った。彼らが去った後は今までの和やかな時間から一変して空虚な時間が流れた。他に釣り人もおらず、手返しも少なくなりボーとして時間を潰すだけだった。

己の欲するところ、人に施す

審査結果は、臨時会員の岩本満氏が１４９７点（アブラコ４７３㎜、カジカ４６７㎜、重量５５７０g）でブッチギリの優勝であった。身長優勝は４２３㎜のカジカを釣った大前事務局長が獲得した。この結果、年間優勝は嵐氏に追尾していた前野氏が僅かに及ばず準優勝となり、嵐光博会長に決まった。

孔子は**「己の欲せざる所、人に施すなかれ」**と記しているが、この言葉の本来の意味は素直に受け止めるとしても、人間の多くは困難を避け、安易に流れやすいという弱点をもっており、なかなかこの域には達することが出来ないように思われる。しかし、その反対はどうだろう。**「己の欲するところ、人に施す」**と解釈すれば、己の欲するところの快楽や我が儘とはいわないまでも「釣り大会で優勝する」ということを名人たちは私たちに施して欲しいものである。

審査結果

優　勝	岩本　満	１４９７点	（アブラコ473㎜+カジカ　467㎜+5570g）	盈　進
準優勝	前野達志	８２３点	（カジカ　390㎜+ハゴトコ254㎜+1790g）	鳧　舞
３　位	嵐　光博	８２１点	（アカハラ345㎜+カジカ　331㎜+1450g）	盈　進
４　位	相馬義博	７５７点	（カジカ　365㎜+カンカイ240㎜+1520g）	荻伏漁港
５　位	山岸　伸	７３２点	（カジカ　364㎜+ハゴトコ242㎜+1260g）	鳧　舞
身長優勝	大前健治	４２，３㎝	（カジカ）	浜東栄

また、『徒然草』に**「偽りても賢を学ばんを、賢と言うべし」**という言葉がある。「うわべだけでも賢者を手本にして努力する者は、賢者なのだ」という意味であろう。ここで大切なことは、賢者にあやかろうとして精一杯背伸びすることなのではないだろうか。そんな心構えで私たちが手本としている名人の姿を真似ているだけでも少しはその域に近づけると思うのだ。

冒頭のカジカを督促された同僚へは、うわべだけは釣り名人の振る舞いをしながら、今回の釣行唯一のカジカを手渡した。**「偽りても　己の欲するところ　人に施す」**